

---

社会的処方としてのアートプロジェクト：ウェルビーイング実現のための基礎資料  
—200mの紙を用いたインスタレーション作品制作プロセスから探る—

神田未和、アーツカウンシルしずおか

---

### 概要・要旨

本報告書は、東部・伊豆地域文化ネットワーク形成準備事業「F\_P polytope（エフ・ピー・ポリトープ）」における作品制作プロジェクトを対象に、制作過程で生まれた人々の関わりや体験を、社会的処方の視点から整理したものである。市民ボランティアとアーティストとが協働する制作現場の観察およびインタビューを通じて、文化芸術活動が人々の関心を起点とした参加を促し、ゆるやかな関係性や主体的な関わりを生み出す様子が確認された。これらは、社会的処方の基本理念である人間中心性、エンパワメント、共創と重なるものである。本報告書では、文化芸術活動が医療や福祉とは異なるかたちで人々のつながりやウェルビーイングに関わることを整理し、社会的処方としての可能性を検討する基礎資料となることを目的とする。

#### <東部・伊豆地域文化ネットワーク形成準備事業「F\_P polytope」>

主 催	静岡県
コーディネート	アーツカウンシルしずおか
アーティスト	中島崇、水野哲雄、小鷹拓郎（公募）
協 力	長泉町、ながいずみ観光交流協会、ベルナール・ビュフェ美術館、長泉町井上康文学館、特種東海製紙(株)、根継商店（(株)平成建設）、NPO 法人レザミ・デ・ザール、yacht、Lab Qrio、平野雅彦（静岡県広報業務アドバイザー、静岡市及び三島市文化振興審議会会長）、辻修次（美しい伊豆創造センター ジオパーク推進部長/専任研究員）、石神夏希（劇作家、SPAC 秋のシーズン 2025-2026 アーティスティック・ディレクター）、鈴木竜一朗、神田未和

#### <poly\_papier - インスタレーション制作>

主 催	静岡県
コーディネート	アーツカウンシルしずおか
アーティスト	中島崇
マネジメント	NPO 法人レザミ・デ・ザール

## 1. 背景

アーツカウンシルしずおかは、すべての県民が創造的になることを目指し、アートと多分野の連携促進や、人が本来持つ創造性へのアプローチに取り組んでいる。特に多様な人々が参加しプロジェクトとして進められる「アートプロジェクト」の影響力に着目し、住民が主体になるアートプロジェクトを推進している。今回の東部・伊豆地域文化ネットワーク形成準備事業「F\_P polytope」も、プロジェクトとしての展開に重きを置いた企画となっており、その中の作品制作プロジェクトを対象に、制作過程で生まれた人々の関わりや体験を、社会的処方視点から取材・整理することとした。

本報告書の目的は、市民ボランティアがアーティストと協働する作品制作過程に着目し、そこで生じる関係性の変化や意識の変容を記述・整理することである。その上で、社会的処方における文化芸術活動の役割、すなわち、健康やウェルビーイングに対してアートが寄与しうる独自の価値を明らかにする。さらに、得られた知見を、異なる領域をつなぐ地域の実践へと活かしていくことを目指す。

### <社会的処方について>

社会的処方（Social Prescribing）は、薬や医療処置だけでなく、地域活動や交流など「人とのつながり」を処方し、健康や幸福感（ウェルビーイング）の向上を目指す取り組みである。1980年代頃、英国の一次医療（GP）を中心に広がり、現在ではNHS（国民保健サービス）の長期的計画の中核に位置付けられている<sup>1)2)</sup>。背景には、医療費の抑制や、孤独・孤立など医療だけでは解決できない問題の増加がある。社会的処方は当初、医療者を中心に進められてきたが、近年では「リンクワーカー（Link Worker）」や「コミュニティ・ナビゲーター」と呼ばれる中間支援者が、個人と地域活動をつなぐ役割を担うモデルが広がっている。このように、英国では医療機関の外にある多様な資源へと人をつなぐ仕組みが整いつつある。こうした動きと並行して、文化芸術のあり方にも変化が見られている。アートは「鑑賞するもの」から「つくる・参加するもの」へと広がり、個人の表現や他者との関わりを生み出す実践として捉えられるようになってきた。このような変化は、人と人との関係性を媒介しうる点において、社会的処方と高い親和性を持つ。

社会的処方ではアート活動は重要な役割を担う。世界保健機関（WHO）は2019年に「Arts and Health」に関する大規模なレビューを公表し、アート活動が健康増進、疾病予防、治療、リハビリテーションなど幅広い領域で健康に寄与する可能性を示した<sup>3)</sup>。音楽や美術、ダンス、演劇などの創造的な活動は、人々の社会参加やつながりを促し、心身の健康や幸福度を高め、孤独や不安の軽減、メンタルヘルスの改善にも効果があるとされ、医療や福祉の現場で活用が進んでいる。

また、社会的孤立が、喫煙や飲酒、肥満などと同等に寿命に影響する可能性が報告されている<sup>4)</sup>。健康を支える手段として人とのつながりや社会参加の重要性が再認識され、それらを医療と接続する社会的処方への関心が各国で高まりつつある。

日本では、2020年、経済対策の基本方針である「骨太の方針」で社会的処方が「孤立・孤独対策」の一つとして位置付けられた。2021年には内閣府に孤独・孤立対策担当室が設置され、2023年には「孤独・孤立対策推進法」が公布されるなど、孤独・孤立への対応は政策として段階的に整備されてきた。こうした動きを背景に、日本でも社会的処方への関心が高まり、アートを活用した社会的処方の実践も、各地で広がり始めている。

## 2. 事業概要

### 2-1 東部・伊豆地域文化ネットワーク形成準備事業「F\_P polytope」

本事業は、静岡県が計画する東部・伊豆地域文化ネットワークの形成を見据え、そのモデルとして実施するものである。

### 2-2 対象とする作品制作プロジェクトの概要

対象としたのは、「F\_P polytope」の一環で実施された、現代美術家・中島崇氏によるインスタレーション作品「Pulp it!」の制作に、市民ボランティアが参加する形で実施されたプロジェクトである。（「poly\_papier」）

特種東海製紙(株)から提供された200mのロール紙を用い、空間全体を活用した作品制作が行われた。

- 制作期間：10月23（木）、24（金）、27（月）、28（火）、29（水）、30日（木）
- 場所：旧ヴァンジ彫刻庭園美術館
- 作品制作推進体制：
  - アーティスト：中島崇
  - アートマネジメント：NPO法人レザミ・デ・ザール
  - 協力：特種東海製紙(株)、長泉町、ながいずみ観光交流協会
  - ボランティア：のべ31名
  - コーディネート：アーツカウンシルしずおか（公益財団法人静岡県文化財団）

### 2-3 本報告書の調査対象

作品制作プロセスにおける市民ボランティアの参加に着目し、制作現場での参加者同士の関わりや体験について観察および聞き取りを行った。

情報収集は以下の方法により実施した。

アーティストと市民ボランティアが協働する制作現場を複数回視察し、参加者の会話や作業の様子、場の雰囲気などを記録した。また、制作終了後1ヶ月時点で、作品制作に参加した一部の市民ボランティアへのインタビューを実施し、参加体験やその変化について聞き

取りを行った。さらに、制作終了後4ヶ月時点でアーティストへの聞き取りを実施した。

### 3 観察とインタビューから読み解く制作現場

#### 3-1 作品制作の市民ボランティアに参加したきっかけ

市民ボランティアとして参加した人々の動機は様々であった。「旧ヴァンジ彫刻庭園美術館が好き」という場への関心から、「紙が好き」「手作業が好き」といった素材や行為への親和性に基づく日常的な関心、「アートボランティアに興味があった」「現代アートの作家と話してみたい」といった新たな経験への関心、さらに「美術館でもボランティアをしている」「専門学校でアートの実践を教えている」といった継続的・専門的な関わりに至るまで、段階的な広がりをもっていた。また、こうした動機に加え、知人からの誘いをきっかけに参加した人も見られた。

参加者の多くは、50～60代の女性で、沼津市庄司美術館（モンミュゼ沼津）のボランティアに登録していた。また、同館の指定管理者として運営を担う特定非営利活動法人レザミ・デ・ザールのネットワークの人も含まれていた。作品制作に参加した市民ボランティアは、地域にすでに存在する文化活動のネットワークを基盤として広がっていたことがうかがえる。

##### <制作現場での声>

「誘われて面白そうだなと思って来ました。ここ（旧ヴァンジ彫刻庭園美術館）は本当にすてきな場所だから、どうにかしてまた入れるようになってほしい。」（市民ボランティア）

「紙が好きで、神わざ大賞とかにもよく行きます。紙を扱う作家さんに接したことがなかったので、旧ヴァンジ彫刻庭園美術館の大きな空間で大きな紙を使って、どんなふうに考えて表現するのか楽しみっていうかね、気になったんです。」（市民ボランティア）

#### 3-2 制作現場の様子

制作現場はアーティストの指示のもとで作業が進められていたが、上下関係を感じさせる雰囲気はなく、参加者それぞれが自分のペースで取り組める環境が保たれていた。作業の中心は、紙を貼り合わせる、丸めるといったシンプルなものであった。200mにおよぶ巨大な紙を一枚丸ごとしわくちゃにしていくという、一見すると目的が分かりにくい工程である。素材の大きさゆえに自然と全身を使う作業となり、多くの参加者にとって新鮮な体験となっていた。

制作初期の作業を観察すると、参加者の体験には一定の流れが見られた。まず、作業の不可解さから、思わず笑いがこみ上げるような「不思議な楽しさ」が生まれる。次に、素材の特性に触れながら、自分なりのやり方やコツを見出していく「学びや発見」が生じる。さらに、自由にできそうに見える作業の中にも難しさがあることに気づき、試行錯誤を重ねながら黙々と作業に取り組む「集中」の状態へと移行する。その後、全身を使った作業

による「心地よい疲労感」が生まれ、休憩へと移っていく様子が確認された。作品制作の過程では、楽しさ、発見、集中、疲労といった内的体験が短時間で連続的に生まれていた。

<制作現場での声>

「紙を丸めると聞いていたから、A4サイズの紙を丸めると思っていたら、想像以上に大きくてびっくりしちゃった。笑」（市民ボランティア）

「大きな紙をくしゃくしゃにするなんて初めてで。なんか笑っちゃうよねえ。だんだんコツが掴めてきて楽しくなり、1日だけのつもりが3日参加しています。」（市民ボランティア）

### 3-3 制作を媒介にしたコミュニケーション

制作の場では、市民ボランティア、アーティスト、コーディネーターの間に対話が生まれ、共同作業を通じて関係がつけられていた。市民ボランティア参加者は声を掛け合いながら作業を進め、休憩時間にはアーティストも含め日常的な会話も交わされていた。アーティスト・中島氏は、「参加者が楽しみながら何かを持ち帰れるような体験を大切にしている」と現場で述べており、制作過程自体が交流と関係形成の契機となっていた。

<制作現場での声>

「作家ごとにコミュニケーションの方法は異なるのですが、中島さんの作品は体験型・参加型で対話できて、ボランティアする側もマネジメントする側も楽しいです。」（アートマネジメント関係者）

「活躍している作家さんと一緒に作業し、優しく教えてもらえて、自分も役に立てていると感じられたのがうれしかった。」（市民ボランティア）

### 3-4 それぞれにとっての制作現場と制作体験

#### 3-4-1 市民ボランティア・Sさんの場合

制作活動に全日程参加したボランティア1名（Sさん）に、活動終了から1か月後に「参加した結果、何が起きたか」を振り返るインタビューを実施した。

Sさんは、モンミュゼ沼津で長年ボランティアとして活動し、現在はスタッフとして関わっている。モンミュゼ沼津のボランティアの中心的な存在であり、本プロジェクトの参加体験や関係性の変化を捉えるうえで、重要な視点をもつ対象である。

#### ① 制作体験における学びと内面的変化

Sさんの作品制作ボランティア体験は、自発的に動き、内面的な変化から他者や日常との関係性の変化へと広がるものであった。制作過程では、大きな紙を扱う作業に驚きや楽

しさを感じるとともに、作家の意図や技術に触れる中で学びや発見が生まれていた。

「作家さんの目線でお話を伺う機会はなかったのですが、制作に関わりながら、現代アートはどんなものかとか、人となりはどんなのかなとか、世間で評価されている先生でしょうからどんなことが評価されているのかなとか、色々知りたかったんです。」

「大きな紙のロールをつなげるのに、のりで貼るだけでは無理だと、それしか思い当たらなかったわけですよ。先生（中島氏）からのりの付け方や幅の取り方とか、まっすぐきれいに貼るための工夫を伺い、それを知れただけでも良かった。『それでいいんだ、あれこれ悩むことはなかった』と気づいたりね。そんなふうに自分としては結果ができたので。」

また、Sさんは日常生活における人間関係の複雑さを日々感じていると言うが、その複雑さに対し、アーティストからの明確な指示があった本制作ボランティアでは自由に考えながら作業することができ、気楽で楽しかったと語る。「気楽にできる」という感覚は、日常の複雑な人間関係から一時的に解放される経験として、心理的な軽やかさをもたらしていた。また、「正しくやらなければならない」という感覚から解放され、自分なりの関わり方でよいという安心感をもたらしていた。

「大きな紙をくしゃくしゃにするでしょ。自分の体重をかけたりしてね。今回もどんなふうにするかわからなかったけど、先生が『それでいいよ』『もっとくしゃくしゃにして』と指導してくれる。それはとても嬉しかったですね。今まで人付き合いとか、いろんなものは自分できちっと処理をして付き合わないといけなかったの。」

「人との付き合いって1つじゃないでしょ、解決方法が1つじゃないんですよね。アートも1つではないと思うんですけど、先生の考えはこうだって言うってくれるので、そのようにすればいいんだと、割と気が楽に、だから楽しかったです。一つ一つ解決できるので。（中略）気楽にできるって大切だと思う。」

## ② 日常との関係性の変化

制作ボランティアへの参加は、日常生活のリズムを変化させ、新たな気づきや刺激をもたらす経験となっていた。また環境の違いに対する感覚の変化も語られている。

「自宅からヴァンジに通うのに30分以上は運転していくので、山も登っていきなきゃならないでしょ。いつもと違う道を走ることによって日常の意識が変わりました。運転の時の姿勢とか、車をぶつけないようにしなきゃとか。普段から気をつけてはいるんですけど、いつも同じ道を通っていると惰性になりがちで。違うところへ行く緊張感があって、頭が活性化されたかなと思います。」

「1日お付き合いした日があって、帰りが少し暗くなっていたんですね。その時に、下でいる時の暗さと、山で暗くなるのではこんな風に違うんだなと思いました。」

### ③ アーティストとの関係性の形成

Sさんは制作現場で、アーティストへの声かけや差し入れを通して主体的に関わり、単なる作業者ととどまらず場を支える存在へと役割を広げていた。また、相手を気遣い、自分にできるささやかな行為を通して関係を築き、そのやりとりが人とのつながりや関係性の形成につながると認識していた。

「先生に『ちゃんと寝ている？』とか、そんなね、すごく身近なことで先生にお声かけができたのは嬉しかったですね。（中略）今回中島先生とお付き合いができて、先生のことを私としては大切に思ったので、『水分補給しているか』とか『リポビタン飲みな』とか、『お昼ご飯持ってきたから食べて』とか、そういうことが私にできることなので。なんて言ったらいいのかな、私の中で中島先生がこう、膨らんだというか。」

「（モンミュゼ美術館で、来館者にお茶を出していたときのエピソードを伺った後）私としては中島先生ともそういう関係になればいいなと思って、最後に赤飯炊いて持っていった。（中略）そういうことが人とのつながりなんじゃないかなと思っているんですよ。」

### ④ 体験の意味づけとウェルビーイング

Sさんは本活動を「自分への挑戦」であり「とにかく楽しい時間」であったと位置づけていた。楽しさや達成感、人とのつながりの実感は、心理的な充足や生活の質の向上といったウェルビーイングへの寄与として捉えられる。

「ボランティアに参加することは自分への挑戦だったし、とにかく楽しかった。ボランティアでとってもいい時間を過ごせたのがありがたかったなと思っています。他のボランティアを私が集めたっていうけど、昔の仕事仲間がみんな助けてくれた。声をかけたら、『私も行くよ』と言って集まってくれた。そのみんなへの感謝がありますね。」

市民ボランティア・Sさんへのインタビューからは、制作体験を通じた学びや内面的な変化、日常との関係性の変化、他者とのつながりの形成、そして体験の意味づけとウェルビーイングに関わる経験が語られた。こうした経験は、Sさん個人の受け止め方として生じたものであると同時に、作品のあり方や制作の進め方、場の雰囲気といった要素にも支えられていたと考えられる。そこで次に、アーティスト中島氏へのインタビューを通して、こうした経験がどのような考えや関わりのもとで生まれていたのかを見ていく。

### 3-4-2 中島崇にとっての作品制作

アーティストの中島氏に、活動終了から4か月後にインタビューを実施した。

#### ① 作品制作のコンセプト

中島氏は、アートの本質を、単なる美しさではなく、常識や合理性を超えた発想をかたちにし、人の感情や感覚を揺さぶる力にあると捉えていた。今回の「大きな紙をくしゃくしゃにして宙に吊るす」というアイデアも、その非日常性や一見無謀にも見える発想を、実際の場で形にしていくこと自体に、アートならではの特性があると考えていた。

「アートは美だけでは成立しないと思っています。美しいものだけでいいならば、技術があれば作れると思うのです。アートになるとそこに大げさに言うと狂気のような（中略）でっかい紙をくしゃくしゃにして宙に吊りたいという、ちょっと頭のおかしなおじさんみたいところが作品の要素に入っている（中略）、そんなこと誰も想像しないよねとか、それをやるのにすごく大変とか、すごくお金かかるみたいところをすっ飛ばして、やる場所に持っていくのが、アートの持っている良さでもあり（中略）」

また、中島氏は、アートは見る人を一律に喜ばせることを目的とするものではなく、作品を見た人に怒りや違和感、不快さを含めた何らかの感情が生まれることを重視していた。そうした感情の揺れを通して、日常の価値判断では捉えきれない複雑な感情や、人の理解を超えるような感覚に触れることを、アートの特性として捉えていた。快・不快、肯定・否定といった区分を超えて、見る人の心が何らかのかたちで動くことが、作品にとって重要だと考えていた。

「エンタメをやっているわけではないので、百パーセント喜ばせる必要はないし、見て泣く人、怒る人がいていいと思うんですよ。例えば、紙を大事にしている人に見てみたら、『なんでこんな無駄遣いしているんだ』と思う人だっただけでいいと思いますし。（中略）見た人がそういう風に思ったり。感情を動かしてくれることが割と重要だと思うので。」

さらに、自身の作品は地域性や歴史をわかりやすく作品化するものではないとしつつも、地域の会社の素材を使い、地域の人の支えを受けながら制作することが、作品の一部になっていくと捉えていた。作品はアーティスト個人の表現として完結するのではなく、その土地や人との関わりの中で立ち上がるものとして考えられていた。

「僕の作品は、地域性とかフィールドワークをしてその場所性や歴史を作品の中に取り込む作風ではないのですが、地域の会社の素材を使わせていただいたり、地域の方々にサポートいただいているのは、分かりやすく外側に出てくるものではないんですが、作品の一部に当然なっていくものだと思います。」

## ② 市民ボランティア参加の意味と制作プロセスの設計

中島氏は、「大きな紙をくしゃくしゃにして宙に吊るす」という発想だけでなく、それをどのように実際のかたちにしていくかという試行錯誤や、地域の人々の支えや現場での関わりを含む制作プロセスも作品の一部として捉えていた。作品は完成物だけでなく、多くの人との関わりの中で立ち上がっていくものとして考えていた。

「僕はアイデアを持ってその場所で作品を作らせてもらっているだけで、作る上で色々サポートいただいたという点で言ったら、地域の皆さんが大げさに言えば作っている。」

「地域の方とのコミュニケーションは作品を制作する上ですごく大事な行為であるし、自分よりも年上の方々に手伝っていただくことがあったので、その方々は僕よりも長い時間この地域に触れ合っている先輩なので（中略）先輩方の言葉によって、制作の段取りや作品をどういうふうに仕上げていくかという部分にも当然影響してきました。」

さらに、中島氏は制作の場に関わる市民ボランティアを、単なる補助的な存在ではなく、作品とともに成立させる頼れる存在として位置づけていた。ある程度の役割は共有しつつ、作業の進め方や動き方は一人ひとりに委ね、必要なときのみ声をかける関わり方をとっていた。こうしたプロセスには、参加者が自分なりに関わることを促す意図がうかがえる。

「ある程度の役割みたいなものはお願いした上で、あとどう動くかは個々にお任せしているというか。そういう中で、自分がどう動いたらいいかわからずにやっているなと思うことがあれば、僕は『こういうふうにやってください』と言葉をかけますが、そうでない場合は別に違う方法であれ、作業が順風に進むのであれば、どんな方法でもいいと思っているので、基本にお任せしています。（中略）その方が、自分がやっていることに責任を持つという部分もありますし、あとは、もうサポートで入ってもらってる時点でもう頼っているの。頼らせてもらっていますというのは明確にしているというか。」

中島氏の語りからは、場のスムーズさや安心感の背後に、現場は複数の媒介者の存在によって支えられていたことも見えてくる。

「役割分担で言うと、アーツカウンシルの鈴木さんはある程度こちらに投げかけていて、私と鈴木さんが密に連絡を取らなくても、間にレザミ・デ・ザールが入ってくださりスムーズになっていて、そこら辺のチーム編成もすごく良かったなと。（中略）鈴木さんの考えがあつての構成になっていたのかなと、今になって思いますけど。そこまでいろんなことを考え、理解した上で、アートプロジェクトを組まれることは少ないんですよ。（中略）大雑把な形で降ってくると、ボランティアさんを集めることも、本当にバラバラだったりとか。（中略）今回は、間にレザミ・デ・ザールが入りマネジメントしてくださったので、とてもやりやすい状態でした。そういう意味では、本当にいいプロジェクトで、無理な企画が無理なくできたと思っています。」

### ③関係性・場の意味

中島氏は、自身を「よそ者」として位置づけ、地域のことをよく知る市民ボランティアから教わり、支えられながら制作することを重視していた。一方で、外部から来た存在だからこそ、その地域を日常とは異なる視点で見つめ直すきっかけを生み出せるとも捉えていた。地域の人々との関わりは、制作を支える実務的な協力にとどまらず、その場の意味や作品のあり方にも関わるものとして位置づけられていた。

「僕は東京に住んでいて、よそ者なんですよね。逆に手伝ってくださった方々は地元の方々で（中略）当然僕よりも地域のことを知っているの、皆さんに地域のことを教えていただいたり。（中略）でも、よそ者が来たからこそ、いつもと違う目線で地域のことが見られるとか、そこの場所を再認識するみたいなことが生まれると思いますし。」

また、中島氏は、作業を通じて初対面のボランティア同士のコミュニケーションが進み、雑談や食事の時間などの日常的なやりとりの積み重ねが、参加者同士のチーム感を育て、場の居心地のよさにつながっていたと語る。制作の場が、人と人との関係をひらく場として機能していたことが伺える。

「作業を通して初対面の方々のコミュニケーションがちょっと加速していたのは、自分が介在して意味があったのではないかと思えることです。手を動かすって脳みそを動かしているのと近いことだと思うんです。だから、会話が必然的に生まれます。自分が間に入ることによって、そういったことが生まれているとしたら嬉しいなと思います。」

「（市民ボランティアの）Sさんがご飯作ってきてくださったたり。どこのお店が美味しいと教えていただいたり、話していたものを買ってきてくださって、それをみんなで食べたりする時間だったり。（中略）同じ場所で集まってやっていると、一つのチーム感みたいなものも出てくるので。休憩時間もそのチーム感の延長戦でワイワイ話しながら食べたりするのはすごくいい時間でしたね。」

## 4. アートプロジェクトにおける場の特徴と人への作用

### 4-1 アートプロジェクトの特徴 -場（ば）-

#### 関心を入口とした参加

本事例では、多くの市民ボランティアが「アートが好き」「旧ヴァンジ庭園が好き」「面白そう」といった個人的な関心をきっかけに参加していた。文化芸術活動は、専門的な知識や経験を前提とせず、個人の興味や好奇心を入口として参加できる点に特徴がある。特定の課題や役割を前提としない参加のあり方が、多様な人々の関与を可能にしていた。

## 柔軟で開かれた設計

アートへの関心の強度や関わりりの深さが異なる市民ボランティアが関わることであったことから、本プロジェクトが特定の知識や経験を前提としない開かれた設計であったことが伺える。制作現場では、専門的な技術を必要としない作業が用意され、初めて参加する人でも無理なく関われる環境が整えられていた。

また、参加の頻度や関わり方も柔軟であり、継続的に関わる人から 1 日単位で参加する人まで、多様な関わり方が許容されていた。こうした柔軟性が、参加のしやすさにつながっていたと考えられる。

## 寛容な関係性と自己効力感

本事例では、市民ボランティアが固定的な役割に縛られることなく、緩やかな関係性の中で関わっていた。特定の役割や成果が強く求められることはなく、それぞれの関わり方が受け入れられていた。このような寛容な環境は、参加者に安心感をもたらし、継続的な関与や主体的な参加を支える基盤となっていた。また、参加者が自分のペースで関わりながら役割を見出していくことが可能になっており、自分自身の能力や関わりを肯定的に捉えやすい状況が生まれていた。

## 関係性が生まれる場

制作現場では、参加者同士の会話や協働作業が自然に生まれていた。既存の関係に加え、活動を通じて新たなつながりが形成される様子も見られた。さらに、参加者同士のつながりが新たな参加を生み出すなど、関係性が連鎖的に広がる側面も確認された。一般に、人とつながることを目的とした場では、時として関係づくりそのものがプレッシャーとなり、息苦しさに変わる場合がある。しかし、アートプロジェクトでは間に作業が挟まることで、そのプレッシャーと正面から向き合わなくてもよい状態が生まれていた。

## 4-2 アートプロジェクトの特徴 一人への作用

### 非日常体験や新しい経験、そして挑戦

参加者は、制作を通じて日常とは異なる時間や体験を得ていた。例えば、市民ボランティアに参加した S さんは、本活動を「自分への挑戦だった」と振り返っている。S さんにとって本プロジェクトは非日常の時間であり、作品制作に関わることや、普段とは異なる場所に通うことが、新鮮な経験として認識されていた。

### 受け手によって変化する意味

文化芸術活動の意味や価値は一様ではなく、それを受け取る人の状況や関心によって異なっていた。ある参加者にとっては非日常の体験であり、別の参加者にとっては他者と関わる機会や関心を深める機会となっていた。

文化芸術活動は、特定の効果を一律にもたらすものというよりも、多様な意味を生み出す

可能性を持っていると考えられる。

## 5. 社会的処方との関連

社会的処方とは、医療や福祉の支援に加え、人々が地域の活動やつながりに参加することを通じて健康や生活の質の向上を目指すアプローチであり、「人間中心性」「エンパワメント」「共創」といった3つの理念が重視されている。

上述したアートプロジェクトの特徴は、これらの理念と密接に対応している。具体的には、以下のように整理することができる。

- 人間中心性：関心を入り口とした参加、受け手によって変化する意味
- エンパワメント：主体的かつ自分のペースで関われる環境（柔軟で開かれた設計、寛容な関係性と自己効力感）、非日常体験や新しい経験、そして挑戦
- 共創：関係性が生まれる場、アーティストと参加者が協働する制作プロセス

まず、人間中心性の観点では、参加の出発点が「症状や問題」ではなく、個々人の「関心や好奇心」を起点としていた。特定の活動に人を当てはめるのではなく、それぞれの関心や生活背景に応じた関わり方が許容されており、参加の意味付け（意義）が各個人にカスタマイズされて成立していた。つまり、その意味付けは個々によって異なり、一律に規定されるものではない。効果をあらかじめ定めず、「これが効く」という前提を持たない関わりがなされていた。

次に、エンパワメントの観点では、参加者が自分のペースや関わり方を選択できる自由度の高い環境が整えられていた。活動への関与は強制されるものではなく、特定の役割や成果が強く求められることもなかったため、「自分なりの関わり方でよい」という安心感をもたらし、参加者の主体的な関与を支えていた。参加者の自由度が守られるアートプロジェクトの現場において、参加者が自分にとって心地よい選択ができていたとすると、その経験は、自分自身で選び取っているという感覚を生み出し、参加の意義を自ら形づくることにつながっていたと考えられる。この経験の積み重ねは、自己を肯定する原動力の一因となる。また、制作を通じた非日常の体験や新たな挑戦は、単なる気分転換にとどまらず、「新しい自分に触れる」「自分にもできるかもしれない」という感覚を生み出していた。こうした経験は、自己効力感の形成や主体性の回復につながるプロセスとして機能していたと考えられる。

さらに、共創の観点では、アーティスト、市民ボランティア、アートマネージャーが制作プロセスを共有しながら関わっていた点が特徴的である。専門職が一方的に提供するのではなく、会話や協働作業を通じて活動や関係性が形づくられており、その関係性が新たな参加を生み出すなど、連鎖的に広がっていた。多様な関与のあり方が許容されていた点も

特徴的である。

以上より、本事例における文化芸術活動は、人間中心性、エンパワメント、共創といった社会的処方の基本理念を、具体的な実践として体現していたといえる。

## 6. 考察：アートだからこそ寄与できること

本事業の制作プロセスからは、文化芸術活動が社会的処方において持ち得る役割が見えてきた。特に本事例では、①関心を起点とした参加、②安心して関われる場、③相互作用の中で関係性が立ち上がること、④そこから生じる個人の変化、という流れで捉えることができる。

まず、文化芸術活動は「問題」ではなく「関心」を出発点として参加が生まれる点に特徴がある。医療や福祉の枠組みでは、支援の必要性や問題を出発点とすることが多いが、本事例では、創作への関心や「面白そう」といった動機から関わりが生まれていた。そのため、特定の困難や問題を前提とせず、多様な人々が無理なく参加できていた。

次に、制作の場は安心して関われる環境であった。市民ボランティアは自分のペースや関わり方を選択でき、特定の役割や成果を強く求められることもなかった。評価や正解に縛られないことで、心理的な安全性を担保される状態が保たれていた。その結果、「自分なりの関わり方でよい」という感覚が生まれていた。

また、専門性や明確な目的がなくても参加できるため、多様な背景をもつ人々が自然に集まり、他者との接点が生まれていた。医療や福祉の場では、支援する側と支援を受ける側という関係が前提となりやすいが、本事例に関わった人たちは、市民ボランティア、アーティスト、アートマネージャーなどと呼ぶことができる一方で、現場での役割は固定されておらず、緩やかな関係のもと流動的なものだった。こうした関わりの中で生まれるやりとりが、新たな参加を促し、活動が連鎖的に広がっていた。

こうしたプロセスを通じて、市民ボランティア参加者には他者とのつながりや自分の感じ方に変化が見られた。変化の現れ方は一様ではなく、個々人の状況に応じて多様であったが、関わりの中で自分のあり方を見直すきっかけとなっていたと考えられる。その中で、「自分が自分でいてもよい」という感覚や、生きている実感につながる様子も伺えた。

以上を踏まえると、この活動は、人とのつながりの中での経験を通じて、心身のウェルビーイングを支える場として機能していたと考えられる。文化芸術活動、特にアートプロジェクトの現場では、関心や好奇心を起点とした関わりの中で、自らの生活や他者との関

係を再構成し、一人ひとりの意味づけや主体性が引き出される点で、社会的処方の実践の一つとして捉えることができる。

医療が主に症状や問題への対応を起点とし、一定の効果やアウトカムを前提として介入が設計されるのに対し、文化芸術活動は関心や関係性を起点とし、効果や意味が参加者ごとに立ち上がるプロセスを重視する。医療が「何を解決するか」を入口とするのに対し、文化芸術活動は「その人が何に関心を持っているか」に価値が置かれ、関わりや関係が自然と生まれる。こうした文化芸術活動の営みは、個人が受動的な支援対象にとどまるのではなく、能動的な生活者へと移行していくという、社会的処方の志向とも重なる。正解や役割に縛られない創造的なプロセスの中で、人と人との関係が生まれ、「自分なりでよい」と感じられることに、文化芸術活動の意義がある。こうした経験は、アートだからこそその価値として社会的処方に寄与しうるものである。

一方で、こうした文化芸術活動の特性は制度として位置づけにくい側面もある。効果や成果が一律に測りにくく、個々人の経験や関係性の中でつくられるものであり、評価や指標化が困難なためである。また、医療や福祉の制度が分野ごとに設計されている中で、これらを横断しながら関係性のプロセスを支えるコーディネート機能の担い手や仕組みも十分に整備されていない。今後は、ウェルビーイング指標など抽象的な事象を評価する指標を参考とした評価の可視化、分野を横断したコーディネートの特性の洗い出しとその実施体制づくり、持続させるための仕組みづくりなどが重要な検討課題である。

本事例は一例に過ぎず、すべての文化芸術活動に当てはまるものではないが、文化芸術活動が社会的処方において持ち得る役割を考えるうえで示唆的な事例である。

## 7. 本事業から得られた示唆と今後の可能性

### ①参加の入口設計の重要性

本事例からは、関心を起点とした参加の設計が、多様な人々の関与を促す上で有効であることが示唆された。特定の課題や支援ニーズを前提とせず、「面白そう」「関わってみたい」といった動機から参加できることが、社会との接点を持つきっかけとなっていた。特に、旧ヴァンジ彫刻庭園美術館は住民の関心が高く、こうした地域資源を活用できること自体が大きなアドバンテージとなる。県管理下で運営され、社会的処方として活動が発信されている事例は全国的にも少なく、医療や福祉の介入と組み合わせることで、患者・利用者が主体的に健康や生活改善に関わる新たなモデルとなる可能性がある。

### ②開かれた場の設計と運営

専門性や役割を前提としない開かれた場は、参加者の安心感や継続的な関与を促し、精神的な健全性や成長につながる。自由度と寛容性を意図的に担保することで、失敗や挑戦

を恐れずに行動できる空間が生まれる。こうした開かれた場は自然に成立するものではなく、運営側の意図的な設計やコーディネート、関わり方の工夫が不可欠である。

フラットで寛容なコミュニティは、人間関係の上下構造による疎外感を防ぎ、ありのままの自己表現を可能にする。この環境はストレスや恐れから距離を置いた心理的安全性を確保し、精神的成長や行動変容の機会を提供するため、医療や福祉の支援プログラムにおいても応用可能である。また、企業をはじめとした人の集まる組織のマネジメントと連動することによる人のエンパワメントへの寄与も考える。

### ③ 関係性やウェルビーイングを生み出すプロセスとしての活用可能性

本事例は、文化芸術活動が関係性そのものを提供するのではなく、関係性が生まれる過程や自己効力感の形成につながる経験を内包していることを示していた。この視点は社会的処方の実践においても有効であり、単に活動を紹介するのではなく、関係性が生まれやすい場をどのように設計するかが重要となる。今後は、文化芸術活動を「社会参加の手段」として位置づけるだけでなく、「関係性を生み出す仕組み」や「ウェルビーイング向上の手段」として活用していく可能性が考えられる。

### ④ 留意点：主体性と負担のバランス

本事例では、市民ボランティアが作品制作に主体的に関わる経験を得ていた。その経験は、支援を受ける受動的な存在としてではなく、地域や活動に関わる能動的な生活者としての自己認識を育み、社会的処方が目指すエンパワメントと共創の実践へとつながる。一方で、参加体験の多様さや柔軟さは、運営のあり方によっては参加者の主体性が損なわれる可能性もある。いわゆる「やりがい搾取」といった課題も指摘されており<sup>5)</sup>、参加者が無理なく関われる環境を維持するための配慮が求められる。

### ⑤ 他分野への展開可能性

文化芸術活動に見られた特徴は、福祉や地域づくりなど他分野にも応用可能であると考えられる。本事業からは、社会的処方の文脈で、文化芸術と医療をつなぐコーディネートの重要性が示唆された。医療がときに非日常的な経験として生活から切り離されて立ち現れるのに対し、文化芸術は関心や表現を起点として、人が自ら関わる回路をひらく。この接続を通じて、医療という経験が生活の文脈の中で再び意味づけられていく可能性がある。今後は、生活と医療をつなぐプロセスとして文化芸術を捉え直し、異なる領域を横断しながら関係性が立ち上がる過程を設計することが大切だろう。また、本事例において、アーツカウンシルしずおか企業が企業や行政、アーティスト、NPO、市民ボランティアなどの間をつなぎながら、参加しやすい場をつくっていたように、伴走するコーディネート機能の重要性が高まると考えられる。

## 8. 社会的処方限界と実践を支える条件

社会的処方には、参加しやすい人や、機会にアクセスしやすい人に効果が偏りやすく、結果として格差を広げてしまう可能性があるという課題が指摘されている。誰でも参加できる前提で設計されていても、実際には生活状況や社会資源（時間・お金・人間関係）によって参加しやすさが異なる<sup>6)</sup>。言い換えれば、「より健康な人がより健康になる」構造を生みかねないという問題である。

文化芸術活動を社会的処方として考える際も、「その場があること」と「実際に参加できること」は別だという点に目を向ける必要がある。どれだけ魅力的な活動でも、参加するための条件が整っていなければ、一部の人に限られたものになってしまう。たとえば、会場まで行ける交通手段があるか否かといったことも重要である。今回の事例では、関心をもった市民ボランティアが自家用車で現地に足を運び、制作環境も整えられていたことが、参加を支える条件となっていた。

一方で、アーツカウンシルしずおかの助成団体の活動だけを見ても、アートプロジェクトはその形態や規模は多様であり、地域の特性に応じてさまざまな形で展開されている。例えば、本事例では都市部から離れた場所を使ったアーティストの作品制作に住民が参加する形だったが、住民が主体となるタイプのプロジェクトや、市民の表現を引き出すことに重点を置くものなど多岐に渡る。また、アーツカウンシルしずおかが、昔からあるアートプロジェクトの例としてよく挙げる地域の祭りでは、姿の见えない神様までが主役となるものである。このように、アートプロジェクトは、地域の特性に沿った様々な企画が実現可能であり、どのような存在に対しても受け皿となる側面をもっている。

しかし、こうした多様性があることと、誰もが実際に参加できることは同義ではない。この参加しやすさの課題は、本事例に限らず、社会的処方全般に共通して指摘されている。例えば、秋田県の農村地域における社会的に孤立した高齢者を対象とした質的研究でも同様の指摘なされている<sup>7)</sup>。この研究では、活動先へとつなぐリンクワーカーの存在や、交通手段の確保が参加を大きく左右する要因として挙げられていた。

この点を踏まえると、本事例における市民ボランティアは、参加者同士や活動の場をつなぐ役割を担っており、結果としてリンクワーカーに近い機能を果たしていたと捉えることができる。それは、上述したアートプロジェクトの場の在り方や、コミュニケーションなどの特性によって、市民ボランティアの主体性が引き出されたことによると考えられる。

#### 【参考・引用文献】

- 1) Longh, A., Redding, D., & Leonard, H. New personalised care plan for the NHS. *BMJ*, 2019; 364, l470. Doi: 10.1136/bmj.l470.
- 2) 白瀬 由美香. イギリスにおける「普遍的な個別ケア」構想：2019年NHS長期計画にもとづく新たなサービスモデルの検討. 2020
- 3) Fancourt, D., & Finn, S. What is the evidence on the role of the arts in improving health and well-being? A scoping review. WHO Regional Office for Europe. Copenhagen; 2019. <https://www.who.int/europe/publications/i/item/9789289054553>
- 4) Holt-Lunstad J, Smith TB, Baker M, Harris T, Stephenson D. Loneliness and social isolation as risk factors for mortality: a meta-analytic review. *Perspect Psychol Sci*. 2015 Mar;10(2):227-37. doi: 10.1177/1745691614568352. PMID: 25910392.
- 5) 繁田和美, 深野裕士, 高橋晃一郎. 多世代にまたがる文化事業とまちおこし事業に関わるボランティアスタッフの意識調査とボランティア活動のための調査と実践. 特定非営利活動法人音楽の架け橋メセナ静岡; 2021. [https://file.www3.hp-ez.com/mesenashizuoka/file\\_20230515-084909.pdf](https://file.www3.hp-ez.com/mesenashizuoka/file_20230515-084909.pdf) [page:1]
- 6) Gibson, K. Social prescribing and classed inequality: A journey of upward social mobility or a road to nowhere? *Soc Sci Med*. 2021;285:114225. doi: 10.1016/j.socscimed.2021.114225.
- 7) Ota N, Ebihara M, Aoki M, Iwasawa A, Yamazaki T, Jung S, Makabe S, Lynch M, Rothwell C, Illing J and Nomura K. Social prescribing for socially isolated older adults in rural Japan: a qualitative case study. *Front. Public Health*. 2025. 13:1659713. doi: 10.3389/fpubh.2025.1659713
- 8) 西智弘他. 『社会的処方 孤立という病を地域のつながりで治す方法』（学芸出版社）2020
- 9) 西智弘編著. 『みんなの社会的処方 人のつながりで元気になれる地域をつくる』（学芸出版社）2024
- 10) n.d., 文化的処方のはじめの一步：暮らしにアートを処方する：東京藝術大学「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」. 2025.
- 11) 稲庭彩和子, 井上英樹. 10代のあなたのための文化的処方ガイド：東京藝術大学「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」東京芸術大学. 2025.
- 12) 朝日新聞 GLOBE. WHO 報告書「アートは病気の予防や治療に大きな役割」イギリスで広がる「社会的処方」 [https://globe.asahi.com/article/15122814?utm\\_source=chatgpt.com](https://globe.asahi.com/article/15122814?utm_source=chatgpt.com)
- 13) 「孤立」にできる処方は何か-西智弘・緩和ケア内科医に聞く◆Vol.1『社会的処方』を上梓、「一歩進むきっかけを作りたい」 <https://www.m3.com/news/iryoishin/832905>

### 【執筆者プロフィール】

神田未和

看護師・助産師資格をもつライター。「みんなの健康」や「よりよく生きる」をテーマに取材・執筆をしている。健康と社会のつながりに関心をもち、語りを受け取り、社会にひらく言葉として記録している。病院勤務を経て、青年海外協力隊としてドミニカ共和国に赴任。その後、約10年間にわたり国際保健医療協力の現場に関わる。2024年に独立。現在は、地域のアートプロジェクト実行委員会や「まちの保健室」などの活動にも関わり、暮らしと健康をつなぐ実践に携わっている。静岡県三島市在住。コーヒーと梅が好き。趣味は全国の梅おやつ探し。

アーツカウンシルしずおか

アーツカウンシルしずおかのキャッチフレーズは「視点をかえる 発想をひらく」。

住民主体のアートプロジェクトの支援を中心に、創造性を活かして固定化した物事の見方に変化を促し、発想を広げるお手伝いをする組織です。

誰もが持っている創造力が活かされる道をひらき、まちづくりや観光、福祉、教育など社会の様々な分野においてイノベーションが生まれる、創造的な地域づくりに貢献します。

ホームページ <https://artscouncil-shizuoka.jp/>